

それから今度はあんまり時代が離れ過ぎるけれど、例の頼山陽の書いたもの。ことに今はその書翰について見ると、これはまた日本一の手紙上手と徳富蘇峰先生などからご讃辞のある人だから、数も莫大なるものであって、文もまた千変万化、まことに端倪すべからざるものがある。しかしその中には、はなはだお気の毒でもあるが、また一面すこぶるその人を物語っておもしろいものがある。いつか市島春城翁が書いておられたが、山陽先生が潤筆料として入った金を次から次へと小野暮庵かに廻し、これを高利で貸付けた利息のことを細々と指図した手紙などはその終わりに、ご覧後は必ずご火中のこと、とチャンと後世をおそれて注意の追書があるにもかかわらずいまだにつつがなく遺つて世人の話題になっているものもあるし、また君が紹介してくれた人は、儲かる人だというから、茶なども好い茶を入れて鄭重に待遇し、かつかねて書いておいた力作をやったりしたが、そのとき、当座のお札だといって銀二枚包んでくれた義理沙汰がないが、あれでは大変損だ。どうしたもんだらう。催促してもらったもんだらうか、それとも彼の国へ出かけた時にウンと儲けた方が良いだらうかと、相談したものなどもあつて、これがみな儼然と残存しているんだから、あの偉業を非常に賞揚する一面に、また青年時代の素行とこういうものとを照し合わせて、いささか感服ばかりでもない口吻を洩すような人があるのであらう。

もうひとつ書翰の話のついでに、細井平洲がその弟子の上杉鷹山公を訪ねて行った時の旅信がある。これは随分長いものであるが、要領は、七十の老いも忘れ米沢侯の孝心にほだされて、ご領地米沢へと下つたが、途中の宿場宿場で、みんな米沢聖君のご師匠様と唱えて大切にしてくれるし、また普門院という寺の門へ来た時には、侯が路の中心に立ちご家は両傍に附伏して待っておられ、自分が駕籠から出て、あまりの勿体なさに手を地にしてご挨拶を申そうとしたが、そうすれば侯もまた手を地に着けて、ご挨拶をなさるほど

慇懃鄭重であつた。やむを得ないから、手を膝元まで下げて挨拶をし、侯は先生ご安泰といつたきりで、あとは双方とも老涙満願であつた。そして休息のために寺門へ入つて行く時も、一歩も侯は前へ行かず、つまづきはせぬかと気をつかつて、手を引かぬばかりにしてくれた。この様子を田の畔に伏して見ていた土地の村人たちは、みんな落涙してすすり泣きの声さえ聞えた、と細々と描写して、「於是愚老なる者、豈泣かざるべけんや、泣かざるべけんや」と感泣しているものであるが、ごく親しいものにその感激を伝えずにはいられなくて、書いただろところの一通がどのくらい雄弁に両者の人柄を物語っているだらう。

以上あげてみた例は、記憶に浮んだホンの二、三に過ぎないけれど、こんな日常の実生活の裡に、必要やむを得ずに書いた手紙、その手紙のようなものが後世に遺つて、はからずもその時代を考慮したり、またはその人の偽らざる反面を、赤裸々にうつつたえてるのは、おもしろいといえはおもしろいが、いささか恐れざるを得ないものを感じるのである。

ということとは、今日この私どもの日常茶飯の裡に用いつつある書類、帳簿、手紙、その他の書いたもの、その何の一片が後世に遺つて、またかくのごとき観察の下に、その時代の精神傾向などを推し測られないものでもあるまい。そのときわれわれの生きていた時代が、こもも良くあつた。こもも強く試練に打克つた、と子孫の国民達に伝えられるものばかりでありたいことを、衷心から希わずにはいられない。

ただしこれは、字をお習い下さいなどということではありません。実にひとりひとりの心構えが集結して、時代の流れを形づけることを念ひ、今の時勢とも稽え合わせたまでのことで、特に申したいことは、芸術の中で一番写真に遠ざかったものは書であり、同時に一番実用に接近したのも書である。しかして一番写真に遠ざかった書が、かえつて不用意の間に一番精神的なものを後世に伝える最も大なる役割をもつものであることなのだ。

中村素堂